



誦 詠
 七部集大鏡
 中

七部集大鏡
 三卷八册
 續猿蓑

^ 5
 2112
 2



門 八利5
臨 2.112
卷 2

猿蓑

ひ左古

續猿蓑





猿蓑

信濃伊九撰釋

俳諧の集法は古今もわたり
愚考 韓文曰 人不通古今馬牛而如襟裾
を以てとて百人一首を並べりあもその思振
りの巻改を食するの 殊りたる天智帝を
格別の沃物より形り 巻軸を廢帝を
より住の山製るより 二を女帝よりして夜
るり 寢ふ衣食住の三つを人とし上
たるをき 大切のよのちをきとてくれば
さて陰陽合体し 衣食住の三つ備りぬ

ハ 意の致るり 殊りたる 丸を抄紙の厚より
人及の大事 人及の 次より花を月
雪の巻終 又我邦の大事 するの 殊りたる
歌の二層とす 赤人 するの 殊りたる
沃物 形り 殊りたる 天智帝を
よ及ふ 形り 殊りたる 天智帝を
むと 形り 殊りたる 天智帝を
その 古今もわたり 殊りたる 天智帝を
今より 形り 殊りたる 天智帝を
一を 形り 殊りたる 天智帝を
古より 形り 殊りたる 天智帝を
部より 形り 殊りたる 天智帝を
此の 形り 殊りたる 天智帝を

一書に挙自集大相好すをりへ大に
くく、其林の老よくく、思ひしや
其の意しは、此の意をよみ、其の
其の意しは、此の意をよみ、其の
其の意しは、此の意をよみ、其の

不変此意を云く心

愚考いひは、流りすも、正徳の根よりこ
く、此の意しは、此の意をよみ、其の
要ふの意しは、此の意をよみ、其の

五徳をいひ、及ん心をとらふ

一書よ兵法よ將の五徳あり

度是あり、一書よ徳をいひ、
の意しは、此の意をよみ、其の

信説をいひ、及ん心をとらふ
をいひ、其の意しは、此の意をよみ、其の
の浦るよ、心をとらふ、
古事、来歴をいひ、
是五の徳あり、
よ及ん心をとらふ、
の意しは、此の意をよみ、其の
一信説をいひ、
とらふ、其の意しは、
自漢、其の意しは、

よる猿子の集の序 吾子々名をとりて
実のよる猿の稿有りは又の書と云ふ人々の
人し物と見えぬや 愚考のよる猿を
翁の自筆と彼小向雲竹とを学ひあふ
てこそ学ばざるや

初志これ猿も小叢を不しと云ふ

古注よ曰定家卿 篠とめて青弓はる井の意
ひるひえ不しの不しと云ふところ此歌を
よる人推居士 歌鳥帽子とりしりのを
て小弓を射る事ありをのらんと所歌の男
と云ふをよるねひて小弓張を思ふよる
よる人 翁を思ふを云ふ猿人志和とのよ
るのよるハ小叢を不しと云ふ人 と猿を
しよるよる人

阿婆と云ふと阿婆と云ふ夜の猿の歌

一書よ小叢の句を此集の父よりしては
句をぬる有り次ししの句を産出する有り
阿婆と云ふと心とぬる猿の舞を姑
蘇城糸のよるやと云ふと云ふ三井の猿と
云ふと云ふ

阿婆と云ふや阿婆と云ふの歌

一書よいこる阿婆と云ふ魚の歌 一名
知と云ふ古人の云湖多ふと云ふて云ふ
貴人々云と云ふ阿婆と云ふ

愚考 金葉集貴人々ひえ山おふと云ふ
よる阿婆と云ふの歌 阿婆と云ふの歌を
阿婆と云ふと云ふ阿婆と云ふの歌を
阿婆と云ふと云ふ阿婆と云ふの歌を
阿婆と云ふと云ふ阿婆と云ふの歌を

廣澤やひさの志らり 沼左席

成美曰 詩經名物 弁解云、に戸とニクと
一名又マヲウウと呼ぶあり此又清るり但
眼上 淡白條ありを異とす

一人ふぬりてきりしをらまき

此句の説よりしきりて元ふをうら次 五芳
日出しぬこの建てきりしをらまき 宗人を降
らふとすゆふ 津田一とむむとゆふを
一人を降らぬとゆふゆふ 一人を降らぬ
志らまきをとりゆふ

るはりしやまらぬの隣の一志まき

一書りふ伊賀の境ふ入とあまきハまらり
きりし昔の系は初をとりまらり
一るりて竹田の里やゆりしれ

一書りふ山城の木儘の里ふるるあまきとこのあまき
そゆり君をとりふんは致をとりあ
初書りふ何とゆふりる船の中

一書りふ能狂言うはる猿の飲行ふふの
中よりそ何とれよりそ答んとあまきゆふり
あまき

ころり雲ふゆりや北斗の星のあ

成美曰 朗詠集 劉元寂 北斗 星前 横
旅 南樓 月下 擣 寒衣 敬齋曰 炙 棧
活法 曰 南極 老人 朝 北斗 又 前 五 初 志
ふ曰 北斗 人 君 之 象 也 又 諺 曰 曰
為 政 以 德 譬 如 北 辰 居 其 所 而 衆 星
共 之
一りあまきゆりしゆふり夜い

芝山曰五雜俎曰百草不長雪而畏霜蓋雲生於云陽位也霜生於雲陰位也

禱ちの松の落葉や神正月

愚考神正月之俗習るる形撰万葉小十月と書して力之十ツキ西京雜記曰十月旅卦為坤恐人疑其無陽故特謂之陽月所以見陽氣已萌也又本朝諸神出雲の大社に集るゆへに神送り神迎神の為ちるなり

百古のるる形中の松よ十月

大節曰夫木集夜笠右大に野の若る方枝の萩も忘りの事して阿の事よ杖そらまはゆく

誤棟をるるめて通り十夜なる

愚考十夜を傳つて云伊勢も貞國とゆゑの美名をるるなりを感し去如堂よりして始て新小津古宗孔を式りて十月六日より十五日までをり又俗よ十五日を急弘丸めたり

葎の花や不る人なき美屋女

成美曰傳灯誦曰美照常製作瀧籬賣以供朝夕麗居士將入滅使美照還報曰日蝕居士出戸觀次美照登父座合掌座亡愚考麗居士語誦曰居士將入滅謂美照曰視日早晚及午以報美照還報已中矣而有蝕也居士出戸觀次美照即登父座合掌坐亡居士笑曰我女鋒捷

之て葉の花少くをくらまふなりやと
あり家より多りと多りの別さなりをを
る

山のまき牡丹の花のまき 裸

愚考内機法法よき牡丹の詩 秋色可
因也露涿英萃不畏雪霜欺

晦日まき色ゆくく入り亥子い

愚考雜五行書曰十月亥日食候令人無病
又亥八十二月小子をる守りのる連八女多
く福入と云く又大成経よ曰亥月増亥天
照太神幸魂大 神安後 智慧多行天地
安候已降初 地安以五色解并五色
幣及月辛酒 五味菓等 誠精素之國
災皆消國後 養と云く類聚國史曰

開化帝十月但刻より初て候を秋す
婿の亥より連八十一月よりふるあり候
の候といふを縁向よしして晦月も過
くと多候の字よ力あり

神迹水はまきのまきの

愚考杜荀鶴の台よ張幽於音夜
過山といふるをりて信ち山ありの
吟ありり必定あり禁秘抄曰件於大
有異物也或六角或八角云 一書よ水
口親涼寺の僧雲月影日神迹よ道坂の
同じ出るといふるを非か人よゆつ
船よありのありのあり 赤柏
一書よ此の雲月影日と神書あり
産夜抄よ雲月影日水影の神一信術

梅の付用いし、交るるは梅を菊のと有
赤梅を七拍の一種あり又阿うく梅と
りし一書は神供よりして梅を飾る
る神居の古例あり梅を太神宮一掃
拍忘る古具考ありの考は三角拍といふ
玉書より抄して書交るる梅枝を冬色
拍を引りし一社の習ふあり 又連神
匠技集は神供八平手は盛りとあり拍八
枚は盛るあり又三角拍といふ有天満宮
にて梅をとりのあり入浮は吉あり沈る
凶あり阿うく拍といふを我考より七拍は
愚考ありし拍といふを我考より七拍は
ありし七拍の傳六拍の傳合して十三拍
ありはありし拍を不用するは器す又

土具考より土貢考あり二説有二見の東流
良考よりと云々を梅の浮沈の考
内大は家良公神居也并は梅の考より
考の并同し拍をとりし神の考を
の注釈等ありし拍の考を解て
此を考を解する天満宮大神宮の解
りし考を解する 成美曰増山并ふ考
報自小豆飯を菊の考を赤梅といふ
愚考膳ありし考は魚肉ありし考を
て菓ありし考は赤豆飯より魚の物計
といへるし必考あり又圖書は契沖云
うし考を解する菓を菊の考を赤梅といふ
りし考を解する赤梅を菊の考を赤梅
を菊の考を解する赤梅を菊の考を赤梅

ある月の水を獲るや其仙苑
昔より曰六月土用申其仙の根を洗ひ
しして梅の樹を花摘別よとや
と云く一説よ土用申よく日小引して
梅のをよしとすといふ

尾形の心よりとるさく生海氣の如
五味堂曰海氣の口をさる事いりの如
を天細女命其口をさくといふ
愚考尾形の心よりとる事いりの如
と云く海氣を海の氣と云く也小氣
を心小氣といふといふと云り

あるさくよ其氣の考居の考
愚考多氣の神を舊事紀曰決列多氣
出現あり亦伊特諾尊也
即八因体

しして日少高とやあり申仙居の通り
階よ大なる石の考居也

住はるぬ旅の心也蓋火 捷

紫叟曰夫才集正二位季統より其
りりしてありく旅やうこすしは
きこののよりありりり火焼くあり
の五文字ありりり

門前の小氣も何ぞか
愚考易よ白雷在地中復先王以至日閑
園高旅不行后不省方云は月を安
一骸を静よす又百友万事を強て
改を字は是も女強通矣白虎通亦の
畧よりあり又手中初事よ云冬至を
一陽来復して陽氣初て至りとき

らるる事ハ身ヲ勤メテ
一又奴婢ヲ養ヒテ
録曰冬至系始祖
厥初生民之祖也
の曰らるる事ハ唐
祚ハとりのり
家ハとりのり
人曰冬至の壽
年十月己丑天皇
て冬至の賀辞
冬至ハ稀
十一月朔日始
祖を免さるる事
又漢和天皇貞觀
二年十月を小るる

大ノ所
て祚
雲月
何
一書
成美曰余
片
此
去
よ
柴戸

の文よまの戸より所よりけり本産なり
ふ考逸を一句も大切なり後念出板
よおよりよも改一きよなり 漢物曰
手家物語よ福系の初より徳大寺九太
将実定岬曰初の月見えむとしてよの多
て惣門をきいよをとりよ建ハ内よりの
聲よして遠そや遠せの露おたをいよ人
るよよあしむきよハ是を福系より大將
屋の口のあしむしとす左の惣門を論
のこよよよとせよを東のふ門をいよ
きよとす 愚考考逸を一句も
大切なりとよよの台よよよとす
初念せりよや 高蟠の詩よ重門深
禁鐘後月滿 躑躅山宮樹秋の付よ

辭 愚考考逸を一句も大切なり

愚考考逸を一句も大切なり
ハ老表百八枚 磨轉之則成百八号
故曰梵造よの鉢基莫と云又経略
云摠子後子倍蓮子後万倍永精後
子億倍よの挽子後五量也又大瑞曰六
根各具六根六又三十六根也
現在未來二世合百八枚也
勝突よよよよよよよよよよ
成美曰勝着よよよよよよよよよ
るり又神る名目数乘およよ載よ
角の蓮よ縁よよよよよよよよよ
秀ららや後よよの世よの精残

一書よ小村山系を七月廿七日芒を
りて以後空を遠くさうかすは穂玉の
林よりよりの歌よまゝとゆり山田の野
のむらむらと人歌よよあけのさ
よとのまゝと 成美曰撰集あは日法らの
あけよを煙の舟心なくくさのあらけり
さる信濃河のなやのすくさくま書あけり
かまふまゝ色のむらむらの舟りけり 公石曰
信濃河新山やの信んもまゝとまゝと
のを遠くそのまゝ人の空をさるまゝのな
ま書まゝの穂よめて遠りけり 後信多信濃
の一の宮健津名高林下信社まゝと
眺とまゝと流流よの信在の林まゝとけり
より者 寅年 申年よめて 壬午めしし

同東の人此集よ婚礼を詠るる寅の年
里坊を子思ぬるのまゝ申るまゝのあき
よりのまゝとけりよ信あるりの穂よの奇
奇信あまゝとまゝ略す
赤字紙よ曰此白師の曰心の味をゆめい
むと数日晴を忘るありとありり 支考曰空
也と空往るまゝ枯木まゝ岩の歌あまゝと
空往るまゝまゝ申るのまゝ吟たまゝと空也ま
まゝ夜の終りをむまゝまゝ申るのまゝま
まゝして瘦の一字まゝ互思の格をまゝ
一書よまゝ申るまゝ歌りてまゝまゝを
あまゝまゝと往と空也と宛向しまゝま
物を詠るまゝまゝ思るまゝまゝま

于鞋を噴 履をら せうきせいの 小はいて
瘦の一字をほくしり 是を台佐と
すりよきと結ぶる 二つ此の
字をほくしり百練して 一つの字を
ほくしり 中略 瘦の一字を 奴国 鞋を 空也 是
奴国 鞋を 空也 是 奴国 鞋を 空也 是
思考 兼 噴 少くも 切 履を せうきせいの 小はいて
次 中 へ 鞋 の いふ こと あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ
空也 上人 兼 中 の 甚 妙 を 合 せ 一 台 と
を 志 せ ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ
心 又 あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ
又 瘦 の 一 字 を ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ
心 又 あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ

空也の末子手真盛といふの二代を嗣
て真盛法師と号し 始て本社の三時
陽を中へ巡行し 瓢をふる 一 甚
行をせしむる 又茶釜を製して市朝小
賣りてけり 是の後ゆるりや
夜称 樂や 鼻息 白し 面の内
男を 称 社の 志 あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ
住吉社を 称 功 皇后 山 兼 歷代 の 天子
及 将 軍 家 より 西 建 之 不 絶 毎 年 七 十
余 度 の 大 奉 祈 の 社 飲 二 子 百 物 十 石 と 云
弱法 野 戦 門 けり 世 縁 の 札
一書よはすの所 あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ
札といふものを書きて あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ こと あり ぬ

とよ強きものなりその礼あり家一を御世の
のちのちのものをいへりといふなり

くもしてゆく年のまうけやいせ無む

愚考いせよのち年等々の因忠法固より

系清すりる多き事いへりといふは

多無仁天皇十六年丁未九月十月甲子渡

今郡宇治五才渡川上よ遷へりなり

元内宮と称するなり多村上天皇御宇

桑主公等の御小皇太子并ハ奥府なるの

いしよ内宮と号すなりといふなり

二年戊午秋七月七日丹波國余佐郡

并系より今の山田の系よ近へりなり

なり曰百八十回年後なりといふ又無む

今日本紀曰神武天皇五十八年紀國

出現伊弉册等之太皇太后崇神天皇六

十九年建立新まを景初天皇五十八

年建之無むを文政一二年三百余年

なり法并の年月異同ありて區あり

解たて換ふなりいふにけよけ

一書よ教改たよりいふにけよけ

かききすすいふにけよけ

愚考考を換ふよとを東西よ引むけよ

とを異列一南向の地を東西よ引むけよ

新をのるる東西よ引むけよ

を横と云南北を縦といふ東西の短の

南北よ四十余云

いふにけよけ

愚考王維の詩よ云官橋采酒空山
本女郎祠別後同明月君應聽子短衣の
詩也依老い此山も国秀の事なる道ハ
一入をうしくつを花女奠列を新古今
集よ歌宵の貞享の改の名妓ありて
え結の六歌仙といふ事なり一人あり
亦謂奠列唐士和法大橋小丈夫吉也

松島一之の詩よ云このや
の毛衣とよめりをき

松島や 髣ふ小衣をこの道なり

枚亭曰云云およ曰法盛法師を夜の子を
とりよ歌よして子きやも思なり 髣の毛衣
とりよ歌を誦しりき道ハ人しめり
るといふ知る小衣是といふ人けり

髣の但し寸法なりといふ事なり
とよみもあるりてけりといふ事なり
おとせめてやみよきりといふ事なり
つりて松島を呼ぶ道とありて
その寸法をいふ事なり 一書よ小髣
のりて揚列よ髣といふ事なり
なるといふ事なり 道ハけり
身とこの道と時をよ小下知るなり
松島よ小衣なり

愚考孝慈母の事なり家礼よ曰慈母謂庶
子無母而父命他母之無子者慈已也
同親母義服齊衰三年又名數小曰
嫡母繼母慈母養母庶母乳母合曰六
母又能与他樂心一名曰慈家礼よ曰是

小出母塚母を合せて以上八母と云
多ふのうけぬ花を牡丹の染うま
公石曰まうまの花をくよりひらき
の花を上よりひらきそ皆陽氣のち
を比る子を又括別より牡丹の大
より咲のちとひらきまうまを
をひらき

智恵のあり人もまうまを
思考の名義集ふ曰決定審記謂之智造
心分別謂之思也そのまうまをひらき
まうま

井のまうまを清く
一書ふ曰清く
と云く 思考 懐懐抄曰於梁縣有小山

山上有水清浅其中生紫竹一林和靖方
疎影横斜水清浅又楚辞曰石渚兮
浅之飛龍兮翻、此依例をひらき
まうま

竹の子り力を得ふまうま
成美曰豊國の神を方廣との境内あり
大園秀吉をまうまを覆醬集ふ火山歌
豊國神廟壁云雲を東山古廟郭
蒼苔蔓草上頼牆英天飛散 無
巫祝秋月春風依主張

竹の子や島隣小悪太郎
愚考悪を帝を大悪を兄弟をの二宮を
さな神月とひらき 應仁公前、赤
社をのまうまをを帝次郎三郎と

後し小呼つきしなりとあり

埔董やんるの事いまをよの月
え紅日埔をえらむとて埔董とりまの
を海屋よおり一は埔の性よりく
ののりしてその董中入て董を引より
た忘らて眠りておりのなりとありや
愚考松送集よよの夜を浦董より子
の表る事やとこの形くあつてくや
らむ又監命婦よりおりののり
たまの夜のえんてぬまそはく
なり

君の代や飛广系を講いよ

太節曰道は至坂田飛广の社よ
朝らよ神事あり昔年を此おの目女
を多し男の数なりと講を改ふい
被てわりのなりとあり松送集れ
通はるる海广の事ありとて
るき人の講の数なり

松ゆいふてふふとて額装

南子紙小曰松装撰の時去来り許一
云おくらあつてお後の論も一集より
何らきそののて書ねり
愚考源氏公帚本の巻よ君の心
を山ありりものくらあつて
りよよみはの額装をそのさ
一ちく心わとてまはみぬ又
の巻よ一はあをたか
を引けはるるなり

あましく煙草をいふきく我らのめやまそ
らの歌のあまらる山田の庵ふ田をちる
子等あまの住宅に離れし山申ふ令
病のり煙の岸をすて新居のたかさ
めとちり心おゆゆりのたさり又このひや
とりあま彼庵の下ふ火をくゆり
煙をきりしめて或る荒坂を拂ハ
しめ若を猿旛麻を去らしむるる
そのりて改火麻火よりおれそを彼人とい
西義といくと煙をよむてを一決しり
今の同義よりを善時田人言ふ蚕を知ふ
蚕をとりいやく称しまふ山墓まう来
て蚕をとく入しりい味糸已ふ不定の言
の蚕養の金をとく蚕室とまを中一を

是則後新穀後の書述てゆりあ
凡蚕養の法正月朔子日ふ年々
より女子をとりいぬと称して蚕室を
きくららひ移い神のり次ふ二月年の日
初て蚕のふねをたかりて暖田ふあてめ
て三月年の日ふりしめて葉ふはて
五月をすしを引時とすとまふあは氏
をすしとりのあ蚕室の内ふ何そをす
き墓をた入しめむや神ふ蚕室を施
ちをししはし況や蚕養の室中一全
煙りあまあ池沼の津を海ふり
ふよてあ蚕任とむむや凡担墓を
本自養水ふあふ蚕任すりあ
然ハ音の惠帝墓をけしと花林苑と

代るのりもさる綴るなり二字ともふ一意と
目のるや葵くさく五月雨

一書よ五月雨のちまきまきなるきくはるその
日孰も思ふにたかほこのるきよふあふひ
のりさるきくさるをる見出しして日のるを
糸一くさるとさるりさるよ葵といつるを尚
日葵一名文菊又日まわりとりよりの北の
葵をて目よ向といふるさるまきなるなりた
傳曰葵能衛其足 成美曰あらあつてい
をとりわきさてみえねとさ日の孰もあつて
こひてうさるさくさるさるてさるまきの心
ともたわさるひ 愚考尔雅曰葵若揆
也葵葉傾日不使照其根乃智以揆之
はりみんさる子たのさけや麦島

大節曰嵯峨日記よ廿日次嵯峨のやうり
見むと相取厄来り去来途中の吟とそ
うさる不羨なるの游力よゆはるやいさるや
ゆ流のけいめや葵の田極さる
一書よ猿樂能大吏家あゆ流といふ流
かの十八卷なるさるあり同く狂言よ田
極歌といふの別よありさるらのるりたを
あつてさる流のけいめとのみゆふあつ
あつさるりて歌を上代よりさるさる流一
す流のけいめと始をさるらのくの田さる
うさるの起りてうさるさるさるさるさる
らさるゆりさるさるさるさるさるさる
あつさるや一首のあつさるさるさるさる
所のうさるさるのさるり出さるさるのさる

その次を子の冠を冠し後一傳りて後
の因幡よまのしし越えしるり一うらふ古代
のうらふ心をうらふしし一師の心のかとに
しひやかへりしし

源ゆやあまのせきたゆりの花

愚考百合をゆをよらこふ子るまはりの
せきたゆりの花うらふこひす

子やあまのむさ子の母も故の嘆心

成美曰万をふふ山上隠良おらら筆を今
をうらふむ子るうらむもこの母も我を万
はらむのうらふよららこひ

子一の夜を言次り冠老ふ名経す

愚考二條院の以金賣吉次未春とりよ
りのあり真列より京部一毎年よりのり
るりせ人のありのあらん

下園や地出なりりの増の志

愚考海衛曰地蠶化版踏折脊出而為
増のありの意を下園をまは濕を有りて
蟬もありのりたそしうらのありしを年を
出すしりり意あり

舟引のあめの唱歌り合秋の花

一書ふ舟引唄ふ舟引ふゆらうまき奥ふね
うらむ我を夜すうらむせしよは

目の星やまの星し星の牛の舌

漁村なる山城國宇治郡赤松と大津のら一里塚
の西の筋あり
あねむこの敷うらむを星うらむ
愚考竹を六十年よりし花咲くを結ふ

を竹則枯りとし有りてをそまきよふあら
てさるき三宮人をも恨りて最望する作有り
誰んをまじりぬく石系畑畔ありふあり竹
有り決して大井の十年枯りてをさし
夕ふ事や岬並のしりらかの署

愚考の岬を虎山と雲の署のさく低く
まをいさるを元山の秋よえありしなるこ

清夜林邊きくや裏北ゆふ

一書よか雲の全昌寺を大層寺の城かに
宿禰あり有り良を夜籠り別道
ては寺よ家ありての吟に翌日翁よ出の
寺よ止家ありしとあり

久月や六月も岩の夜よふ似ん

愚考の漢書抄曰詩文集を依りて夜庭小

晒すゆふ文月とりよ古今俳諧歌六日の
夜の歌よていけうとましく心をさ
ふ物もあて海軍の川系をき入やわさる
祖海をををえとの吟有り近路のる
田のさるよりありしその吟をさる
まじりては境をまじりては境を境
る難し

人合歌の本の委然まじり星の歌

一書よ曰新後拾遺集よま七々の意を
うらみまじりて一夜のまじりよ
らむ合歌を所しよまじりてまじり
あみて眠るまじりてまじりてまじり
の本まじりてまじりてまじりてまじり
まじりてまじりてまじりてまじり

鶯奴曰後道交窓依合欵爰よおいてその
あふあふいといふなり 愚考の格物記ふ
曰合欵一名 夜合和心志一人欵楽爰
よあひそのその葉あふいといふなり
身をりけておらそあひよ木槿
愚考の源氏夕敷の巻よあひ花あふい
てふあふいほいといふなり
の能くか爰あふいといふなり
おらそあふいといふなり
をらてあひいといふなり
選ひ子の祝のあひい
愚考の愚補人の祝の心をあひい
よあひいといふなり

果あふい、甚あふい、うりて東西を
ういなるよあひいの子の祝の
心よあひい

君のあふい交るなり
愚考の目え味を長壽と目えとのあひい
卯七を去来のあひい送りのあひい
るあひい
あひい
新撰万葉よあひい 林日遊人
遠方道
遠楚外見 芦 甚 白花 揺動似招袖
疑是 鄙生 任氏 芳 又古今集よあひい
好のあひいの花よあひい 撫よあひい
袖く袖と見ゆらむ
あひい

大節曰山家集小いにけくむのゆづりて
てふゆきも伏むとけりふつがき及て露
相のありうづはらきるの候の内
一書ふを名おし後成郷自漢秋文を
おまの松竹あり一子てうはらぬるり
深き子の雲は冬あ家の裁入こ

病序の夜妻よ落て旅病か

愚考の白氏長集曰困病て夫憐病
鶴精神不換翅調傷是病丁の依例こ

心せしやる甲の下のきりしす

一書よる多田の神社を八幡と加列
小松宿より一町斗南の道の傍あり
実盛とて秋後別当と号し一里國越花
丸屋より十町をり北長田村の産こ

姦殺初公よ屬し後よ平宗盛よ陰よ
ての條系よて戦死す又実盛の陰よ
のるむせんやる秋後別当よていりるや

二日月よ蓋のありをうり

公名曰食物本草よ曰鰯のあつ鱧の言
日本より有りやあつ鱧のあつを本物
よあつ魚ありと云く都てあつ魚あ

目をして目をして目をしてめあつり日よハ
あつて海産よあり日没して今を
よとて深きり時三日月の照をて見して
くとおらるまうてあつるあつり

加茂よ諸志よるあつり
うらこのあつりあつりあつり
の秋後よりつきてよりや

月新や拍子ありて 膝の上

後物曰撰集抄云曰そののふつこのま
はらうちの建ちりありていふ世とてこのま
後もか後の社よまありちのを年一言こな
りて曰國のつて修りしちの又あり
まありてやと仁安三年十月十日の夜
まありて静之法籠をちりちのふと木の
まの月夜のしとちのりも社とてあつた
まありていふことありていふありていふ
つらうちの又いはれりといふありていふ
愚考柳屋の社まか後の社ありり日本
紀の白持統天皇四年正月皇太后即位り
あり公卿百官列位連連り許奉り拍子と云

周礼九辨の注云曰拍子両手相打く

新不うたふと見送る朝月夜

愚考六條ふちのりいこくちありて
賢利為すふちありての王のち
はくち判刀を免てありてありてありの言
ち判出をたき警るりといふとちえ
ありあり判刀をいふこくといふ
ありありあり

月法一抄れり云云本時宗と云一遍上

一書を祖とす無智権親の告り依
て徳園を抄りて決定往生六十万人
の札を云ふ人ふち本寺を相列り
岩澤山法濟光寺とりて巡國のち

を任職し本山上人を隠居する
二世上人他阿まよりの代に他阿上人を
号す一世上人気比の明神よ泥濘を
あふをりて社に小砂をまきあひるあり
代々の例として系譜の案を門の弁を
末履をとるきり、持前の持多の砂
石をいふる用とす氣比又首後
仲衰を白土行宮の強りて則帝の
買をいふる苗國の一宮なり舊事紀よ曰
二月幸角鹿則興行宮而右之是謂
首後宮

一書に但律曰我子を甥のりて信正を
いふる人の公卿の子をいふるをいふる

愚考礼檀弓に足牙の子を我子とありや

あやあひてきこふをいふる

成美曰和漢三才名号曰鱧^カ鱧^ニ魚形色似
鮎而口固其尾有小岐有聲如蛙鳴人
捕之哀声如曰五紀又似曰岐、崔氏
食經鱧音客和名曰知加布里以鱧
而有黑点也 公石曰きこふを俗に蜂臭
といふ歌詠サフリ我信濃よりてきこふと
いふ此魚鱧に似て針ありとて口至て痛
はより鱧をとるとしてあやまりのりて
きこふをいふるをいふるをいふるをいふる
りふるをいふる一つの附をあり享保
申候に股洪水の後更ふきこふをいふる

こゝ後縁のせらるるおたをきしとるり又
寛政の末よりきこるるありそしめといふ
僧正の妹の小室れきつあつて
一書ふ云彼花山僧正のうけつてそめ
のこよみおたつるありあふ小室のきつあつと
まつたえまつり

一戸や夜もやみき 詔 定

愚考一戸を南朝の盛恩より十五里
かと下るり故を流牧庵 發 義 聖 等
書ゆ 聖 聖 後 上 子 らのくの内 詔 定 二十三日
といふ九二百里の行程るまは衣もやみき
とるり

田舎間の存縁さう 葉の宿

愚考田舎間を五尺八寸厚の厚さ一尺
六分京間を六尺三寸厚さ一尺七分三
分 通 方 六 尺 六 寸 厚 さ 一 尺 八 分 是 々 高
野 間 と 同 じ 吉 野 間 と 同 じ 用 ぶ と 云 々
葉 中 七 尺 厚 さ 二 寸 葉 横 を 取 之 の 半 なる
也 此 以 の ね も 云 々 の 旅 の ね 也
成美曰古今集きのよまを早苗とく
いはるのよみ揃まよきて林邊のつ

神田系

花さきき大名をいふ
愚考 故 是 秋 の ち あり 播 送 集 小 室 氏 子
よて や ー なる なる なる 人 の 子 を 古 昔 あり
あつたのちいふなる なる の ち あり 小 室 氏 子
ひるいふと 田舎の 初 なる なる なる
成美曰 神田系 神系 神大 已 貴 命 在 神

人皇四十五代 聖武天皇 天平二年庚
午鎮座延文年間有故合系平将門
其云 愚考北系五代記曰能系より
より神田の神より賜りたり本祀宣と云
我朝より能の始りるる地神五代天照神
の天の岩戸より入るる一町八百系神集り
て胡倉の一神楽神を奏し多し
以来の世より能式三番と云り出馬
予弱たまを天照太神十歳曆を春日の
神三番申雅久を住吉の神として
あり是等神代の事あるなり又從古
我氏子といひ祈り奉祈禱を
能の舞樂より志願と云り毎年三月
十五日神事能ありと云く物りより上牧家と
小系家の合戦よりして大永四年神事能
おこりよりより能を例として隔年の系祀
ありて今よりそのめ系八幡より暮松
より舞楽能の考あり此人に戸より
より居住し二年より一度の神事能
を治りあり今よりおこりるる能
おこりるる能候方より系礼の能
固を仕りたり列を花芒といひあり
立出り能の文や能なり
成美曰病源福曰風瘰癧一名癰瘡人皮
膚虚る風寒所折則起也和名加佐保
路之
塩魚の歯よりさしや木の葉
一書よりさし入るる能あり

梅咲て人の怒の悔あり
芝山曰梅花悟入師之柔私忍辱心より
て多し怒の悔をたたりし

梅の息や山路獵入る犬の姿似
一書ふ高岳よ入人犬のめしとりつる
詞を返て高岳を梅の息よと
蘇子瞻の詩よ上畧山人醉後鉄冠落
溪女笑時銀捍低我來觀政回風信
皆云吠犬足生鬣但恐此翁一旦捨此
去長使山人索莫溪女啼此溪女を
上擲よ比喩し梅の息よを奪胎
し依るよし梅の息よを奪胎
撰者の句法るるり必定せり
梅の息や山路獵入る雲ハ牛の角

成美曰碧巖之隔墻見角使知其牛

秋蟻や岩ありし方よし梅の息

一書ふは梅の枝を香ら梅の息あり
あり梅の本意とすり香を梅の息と
らして瘦てさしついで梅の息あり
きそのきさしついで梅の息あり
くそのきさしついで梅の息あり
花のころつてし梅の息あり
ありし

は子良子の一しゆりし梅の花

一書ふ信よれらることし太神宮の神
儼よ奉仕する小女あり伊勢神宮の
子良物忌と称す社家二十八家ありて
その娘をとりて神籬をとりて梅の

一書ふ梅の本 希ふるまはゆりしと字を
らるる梅を 法浄潔白るりの花をれを
梅をよめてか婦貞女よ比するや詩歌
るるよよくありてあり
成美曰坂士伝
太神系系詣の記よ云子良として知雅
のをとめのいよと夫婦のわらふもあらぬ
よは膳をを梅よ急用よして石佐を神
神急よるるのめまは二十三十まては月
事するよ一眞監よをふきめまは十一二
よまらるるよつてまは則職を辞す

入相の梅よるるのよいよまらるる

成美曰暗香浮動り 黄昏とる梅の
あぢいよして林和靖の句るるまらるる
あそをるるまらるるの梅よまらるる

よまらるるの梅よまらるるの梅

才雅曰ひとりぬり子のまらるるのうはり
あらぬ根の梅の自あるるまらるる考
よりのまらるる

百八のうねてまらるるのうね

西舞曰百八の障の数を法行 無為是生
滅法生滅滅已寂滅為樂此はるの文
をよる夜中夜よまらるる二十七
撞とりよ則百八煩悩を滅するよめ
数るる 愚危思よよ百八のりよ
冠りよまらるるそののいよけのまらるる
赤染の湯の家集よ障障の侍をよ
よめら後のまらるるねてまらるる
まらるるふかのまらるるまらるる

独寐もよき寝とらむはつ子日
愚考氏家宜忌縁よ曰正月を独寐と
いふ月ありひとの縁違ハ必不祥を招く
もの有りといふ止るを招き違ハ伏菴と
床よ違てありる有りさ違ハそのう一
神子日とある違ハよき寝とらむと思つり
るう心又五雜俎よ曰止月上ノ子甲子
る違ハ是年丙子る違ハ早 戌子る違ハ
蝗虫庚子る違ハ叛壬子る違ハ水と云ハ
痔をくき一來ぬ夜とる違ハ腫と
愚考空也の送青神鼓を 考申五示の
三昧場を夜行す來ぬ夜を云氣よ
ら違ハおろろ有り
うらやより一たのい知何猫の意

去來抄曰翁の曰心よ俗情ありものい
ふい口よ出れといひる有り一違ハ終
是よ即りて本情をあらはさるは是より
然人々名は方よ高く人のもせばやす
多し是り違ともまふいりて一め
本情をあらはさる有り 愚評猿蓑ハ
祖翁の精撰ありて是の七部の内
一のころ花実全うして序よさ一自
筆よ書まひて吟味をそしめり
集るるふりり悪評の台を入り
一きい謂るなり去來抄の海いり
る一 猫よけ白本紙を定家卿の
引らや有り一 世をま志のりり猫の
妻よいさる一 春の夕ら違祖翁送人

を歌りあはく則 定家卿をおとさるる
ふありと陳するれは則 摸写交態の
台法ありて始と終と態を交り
くありありて意味ありての状を
ふふ人 去来おの著言ふあり
るる連 翁曰もあてしるる
る情の本体をよく見ぬいて
用換るり後今い他ありを
用心しておめよ 軽する
ふ

いとゆふのいとあそふと虚本を
愚考 虚本を枯木とあはれ
芽の出るる前ありてくるる

一書よ云一奪ふ柴胡の原と書し
非るり柴胡を糸のなるる
糸拵ふ糸刻の糸を拵る 独活
愚考 本草曰得風不揺 无風自動故
一名曰独揺 叶糸ゆるるを
るる連 翁曰もあてしるる
はく一一名曰千々ラと云 独活花を
白く美るり花ふ大毒ありん
坊のあて一夜毒あり葱のき
古連曰ぎがを葱の花なり人丸の
をるる連 翁曰もあてしるる
萱子小端流ひし後や
愚考 萱を皆亡祿ふのみ

萱草何やらよ曰哉一人一人の子を失ひて
てぬるよねむ一夜の夢にその雨よまの
草生らりとしりつとて道にハハの草を
のよよみ人念の葛雨よりあを道にを塚の
すよき字義の此處葉道悼の白も墓
よむすひもよ此白を文考評して
胸りとすむの漢對といふを思説と
祖籍を世侍よ又盲よ為守の罪又源
くく娘川百首よ昔もくく妹の垣根
をた道よまの法をよまの萱のよ
して右尚梅の白よ三きのの字あろく
る古池集水鏡の梅注よ出守
本瓜勅嬢として見え度世を等ぬ
愚考冬の日よ木瓜の解梅のアサ

一足ホ子ワキ草とくり旅すりあろく
此高筋骨を健よすまハるり

考の筆落しつら 棟の那

愚考考の筆よよみ其の法は梅花を
りしを翁んしつて梅のあろくし
そ見えしつら 梅の花を例
のす法かりひをよハ其をりてうのす
よきせもひり

一枝ハをよめオわろく 山を

愚考我の名を花ぬす人とあろく
あろく一枝を割て梅もあろくし
を花よ笑をよめり又をよめり
人とれりよめり
考新よはつてきハ花の考

成美曰に於抄曰玄實傍終都と辭
すり時きつ國を山水子より一とた不
き君う初るす子以中より進い定

嵐とて春の夜何進そ花朝

愚考乃朝を和名抄よ由波 祚代卷曰
天照大神脊よ十箭の朝五百箭の
朝を履と云く武用年略よ曰空極を
突を盛物るり空とりよりの植を等
より快裏抄よ曰楠正成の製すり字よ
宗と書片うるんて進れくするり又く不
の文字廿四通書方あり云集るよ略す
大考や吉野の集の花の泉
愚考花よ集ありとや快強書の心
えりてとて集く入りよをさくためて

集りありより野の山台さるゆらるり

乃灌や花をくも代を後りか
一書よ曰乃灌を太田持資入道源頼政
之裔文武の才士あり文昭十八年強倉小
て討死す年四十二やよる名ある建之
愚考乃乃灌を利餐の号るり和歌八集
弁三十六歌仙の一人よて世人名り所と
探すよ夜らる花の立すり

愚考乃宋書曰宋の武帝の女壽陽公主
人日含章簷下よ階梅花公主の額の
上よ落つ五出の花を成す是を挿
とて去らる自後して梅花粧あり
源氏の娘をえりて之安と伝るる麻
袋の摸字あり

考の根を刷ぬるに志す

一 考の根を刷ぬるに志す
古江よ曰は服を不白の首をとりかざる

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

考の根を刷ぬるに志す
考の根を刷ぬるに志す

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰肥後必永善寺あり水泉池清あり

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一書曰唐の詩人ありて茶紙を書く

一 不ゆりのす 你ら建ハ是未此積小近
くつむとて建ハ能因のさくいよし お不つ
この般

るく金てうきし 十れとる
子代控つてのそとをく子目して

一 書小十の益を乎生の潤慶よを
以とて見えて子目之松をく降く
西新家集子代控つてのそとをく
後めてや君のよをくのそとをく
愚者り文徳実録曰 天安三年 二月禁中
有曲高預之者不遇公卿近侍數十人
昔者上之申必存此事 時謂之子曰然
也松といふはして二るるをく
定をくしき後ありの文

金瑤と人よ呼ぶ身の安さ

一 書小用達の町人の並入くく
りして 結拵ゆりの腰の物をきく
その侍ゆりぬし せるよりを
しと急をきく 一書小流慶の
侍必のきより只今定儀をよし
くせりゆりのは急よ入の侍ゆり
急を侍ゆり

物をきくゆり 花とちりゆり

本曾の研茎よはゆり
一 書小西念を法然上人の身子こ
刑をくらり 一書小例の款惠の侍
何をきく 只侍ゆり

一書小法の事所謂之は切りの梅小の
葉の色をまじりて東海を吹返一口小
そのことしるの感嘆少なるべし云々

忘るべきに秘めて中々事小なり

成美曰三才果云曰今云稷圃子之類
古者祭多用黍稷今則以糯糗食又和名
抄糗之度政祭備之又字法撰造一也云
忘るべきに秘めて一々事小とらせられハ
愚考神名目於聚抄曰糗米を蒸し
て鶉卵の如くおよせして斤木小盛て神祭
ふ備へ

稻の葉近のちりりるのきり

愚考新の白と萩の白とる五白の
白葉の如くして交まらるる

穀心のほりぬみ類の 於鹿山

内義政の如く呼ばるる

古往昔曰西形の物とす去來文小曰
此の實小西形をみりぬよせしるる小
て小又西形於兼山を綴り時於兼山
うき世をよそよより撰ていふるり
ゆく兼実るるる心 愚考此又体更
よ心ゆりいし 箱の白をきして我らの
めくあやうしりる命をまじりきり白の
撰授とあちちあちちにしてる一さ文
体るり又世上の説よる内義政とを
虚名るり只し 實をの物とるるを
くよく人を定るる愚しと云いりるれ
ハろく撰授の海るるりるるるり

つら〜海鳥の記なるの記を偽造しよとせ
よ致るをどめ有り隠念中向まおと邊より
類聚国史よりよく叶つては解もるを致しよ
子房を集有り西行よ撰集ありありあり
よあ心集有り皆その集の和歌の源を
りりてその人の付ををを〜まは續よ
げらめ〜物そ〜うふ〜まはやまらよ
も致集よ西行の歌集よ〜はとて西行と
いふあり〜る〜る〜る〜る〜る〜る
を東流るるの大國より〜て昔あり歌よ
人夫西行のあり

所刻の眞多小西言
すよき〜松の志〜る人なり
一書小西の事〜刻を悪〜まの〜

星宿陣法小箕陣あり又一説は旗
とよ弁て方篇を略すとありよよ
ら及と云々 無味堂曰小西行長の歌
巨小堀内義政とりよりの拔能〜
未ゆの懸りり〜愚考は曰維
南有箕載翁其舌又史記曰君臣
斥絶不和箕為敖客又史記正義
曰迷惑犯守箕尾氏星自生 芒角
則有幾傳之事ゆ〜小戰場の仇
手〜〜〜 箕を 聖漢之切〜居之
切キキの〜とよ心〜 索隱曰宋均云
箕以簸揚調致為象又箕受物有容
来〜客之象〜 箕星の危〜の
内義政を拔能の侍とえて君臣斥絶不和の

象を附するもの乞其の身之御次の白八百本
の云々の松を著二の白を著とめしりて

兼の札藤の札よよ并るなり

去来又よ曰乞を撰集抄の故よりを

中しとまき 愚案撰集抄よ曰西行法師

伝流玉依のやくりを著して細ありし

よる字すこししきはらとゆりく

ひをえしてましりまひしよ藤りりや

を并るふしるを著して藤としてすみ

著しり傍あり藤の内よそのを著しよ

紙よて札を著しりそのそのの札よ紙

あり藤を著しり松の松藤のいり藤心

よるしむしりのをのさよまきし萱萱葉

萩女希花曰そ略す兼の花うつらよ

の松りをもふし藤もまよししははゆを

ちりははし西行回て云いははくよの藤り

まよのやとりしよ小初を著してまのま

よりとはりりよを著しりまのまのま

とん又一町はりり藤りりよ六千計の傍

のうらましし藤を著して藤りりよ小

まよのましし本の枝よ紙よてれを著

まよのつり田葉の雲ふしりまよしり

まよのつりすやの月たらそい藤もてまの

西行のまよまよまよの藤の藤の心やまを

まよのまよの傍曰れまの藤の心やまを

てらまよし月まよまよの藤の心やまを

と書るし藤もまよし藤のまよまよまよ

二人の身を著るなり藤のまよまよまよ

をさめてき整へ細めまゝと云ふ
ものころりたるをりて美の目よ美整
梅をさめけりあるを思へ合せたる
はくさくまありて魚くまあるを

成美曰 夏木集曰すそのまらいたる
すくく小倉より山の志げみある
伊室おろしぬ 舟の海はく

又瀬戸内とけり入るまより九列港一り付
て舟海とけり入ると云く内海の浪の満
干空りありと 杉葉三才集云より見ゆ
舟海とけり浪の波はく

大膽よおのいなるはまを

公右曰 伊勢物語曰 陸奥の女をりて
ひ一夜らりてまよと夜涼よま出まつし
女は 夜もあまをききけりまらめあつし
りけりまのまよとけりまらめあつし

小刀の拾みあり 細工 くら

浅美曰 獄人を歌入るよの浪よりしりまら
くはくまの小刀のあま一まきまのまら
まら

そくく海みわとまらめあつし

一浪曰くくあまをききけりまらめあつし
愚者小工面の心より一工地悔りくら
くらめ等皆まらくの字のりり

幻住菴記芭蕉竹

一書小祖菴幻住菴の文を三通あり
の一通を菴抄舎小守宇の一通を賦之決の
一通を猿蓑集よ出

石山の奥岩洞のうしるふ山
あり國分山とりふそのうみふか
るの名を傳ふある一

愚考江列栗太教決田より石山を
舟ふりて行る一里計幻住菴を
之義侍寺の境内より行守玉を
え正天皇養老五年勅命ふ
玉上建らる初基を造り丈六親
の像を造る

麓小細き流をわたりて

翠微小堂なる三曲二百歩
ありて八幡をまじせり

一書小翠微を山の半腹あり 成美曰

杜牧詩与宮勢壘上翠微 雨後曰山
未及頂上在旁坡陀之處名翠微か

しこふ八幡の小社あり侍ふ推の本
あり昔のよやとゆり 一書ふ山の

形の美ありも翠微といふ
神体なる殊院の尊像とや

唯一の家より甚忌よりるを
両部光を和らげ利益の

塵を因しう志あり

愚考殊院を傳灯録曰性情尸如父之

南ふ流をさぐるふ心を能くしおるる人
身をよめるまゝのしるしを能くしおるる人
らまゝのしるしを能くしおるる人

山々の未申あそびをくらゐらへん家
よきしかなとふ備はり南蕙峰

よりのおろし

一書ふ家信ふ曰南風之薫芳可解吾
民之温芳 愚考熏風復の終るると
三・文続集より見ゆ又呂氏春秋曰東南
の風くさりの

山は良の言根よりの唐嶺の松
をうすすふあそびを能くしおるる人
初るるを能くしおるる人

本樵のしるし

一書ふ山中に事奉 樵唱有時字の傳ふ
愚考或ものふ曰本樵の年を本樵の頃
をとりよとせよまゝ此をうすすのりよ
あつた樵吏の頃ありと刻りし

麓の小田ふ早苗とりの秋
能くしおるる人
をくくする美奈物とくして
あつたしるしを能くしおるる人
之上山を士峰の傍ありとて
本樵あそびのちきし 柘とたれん
あつたしるし

愚考三上山とら富士十名の一ツふ
して 蜈蚣山とりよ士峰も十名の

佐々後一と云ふあり

一書小山谷集徐老海棠果上王翁
主簿峰庵注云云徐佐樂道隱於
藥肆中家有海棠數株結其上時
与客果一飲其間又王在人多稱四方
歸結屋於主簿卷上嘗有毛人至
其間問道 愚考主簿峯と書る
非あり主簿を官名あり同の唐名
ありて江西の廬陵郡よりあり木客
号といひはる小丘あり眠の下
白毛を等しうを主簿といひはる
の危形小似し連はして主簿峰と
いふありまもて之を繋ふ小似し連は美鶴
山といひありぬ

唯睡癖山民と成て

一書小癖史曰李蒙老睡を好み
危人と云ふすり小食強て博棋を下す
蒙老を輒枕小丘きて眠ふ危の敷
局終る時一度展席をとりて
一層の公等展席をとりて
愚考冷齋夜話曰范堯夫小睡眠の詩
あり五雅祖曰睡を嗜む者あり邊老先
杜牧其和数人皆有此癖近世張東海
有睡遊記又陸放翁睡癖の詩ありと
述ハ詩をとりていふありあり
展敷小展敷をとりて
一書小展敷多山の言き教之 芝山曰
王子端待小门前剥啄定佳客簪外

爰本甲斐の穀虫と号す爰安寛
永の間の能書あり爰子未詳号
稱してりいしや 愚考未白待大后
是又康之爰父云く又爰君と云
爰のイツクエあり

まの山をとりての猿鹿と
云やらの器多くをいへるなり
本音の接字然の若し兼斗
枕の上の柱ふりけりるを
しとていふ人ふ心を動し
けりる宮中の翁里のたのこ共
入来りてみすのたの福といふ
一兔の豆畑のこのいふなり
爰の農後日院ふ山

の標子

一書小雲谷雅録未晦庵野人載酒
未農終日已夕右古文系集の免
夜坐静小月を待ての歌
を待ての灯をえりてを因西小
是非をえりて

一書小夜坐不厭湖上月 一書小莊子
新物海日因西同系曰曩子行今子止
曩子坐今子起莊子曰義曰因西
彰邊之終落者此時是非待彼之
喻也

のくひをいへるなり
寂をぬき山をふ跡をい
くさう心とていふなり

病身人小倦て世をいと云
し人小似りり情年月の
う花りのうー撫子、身の料を
おりよよのの財を仕友を余
の地をうらやみ

一書小翁を若堂家同苗仁古馬門友の家
辰杉尾甚七高と云陪従の小翁を
富をえうらやみ多りのむ一なるうら
一うは佛新祖室の飛よ入

終雪よ身をとちめ花をう瀧
を骨ーして驚くせ涯のえりり
あーとるまじハ流よを能無
才りーしてはひをえらよのなる

新祖室 一書よ曰佛頂禪所子冬
して採すかーく字ぬーりとま

んも余ふりー流よ数家のるとう
流階の一をらよはるうりて生涯を
流らとらる

樂天を五勝の神をさうり

老杜を瘦りり 樂天約よ老達佳

一書よえ摸寄 樂天約よ老達佳
京惟惆悵 兩地 各傷無限神

成美曰小夜の森見よ云良基云樂天
といふー人る能文少みをはらり
らまのゆーよ心をらうまてわく
よりの心むののひをらーと待よは

あつむふと無しつり又小説小日鄭
度好書若紙で惹き持の事を
彫へて乞ふ書で樂しむ傍にお似
つり 愚考家隆卿云の紫を考の
る多ふ人書はげつたおみくまの
やふゆり遠きよはげつてをり

教や葎の中の花うつき

愚考白氏文集葎室中有美人常
織絹鬪新市又字苑ふ日教眉る
のるるりカホバセト訓す

あつむふと無しつり又小説小日鄭

愚考源氏よるあつむふと無しつり又小説小日鄭
句入書曰蹴躡るり字彙曰緩歩の形るり
膳和来や早苗のつけふ夕涼

愚考山王公の礼の供済を忠守ゆゑ小膳和
淡といふ世に切つて事をせよとよこるるりや
一あつむふと無しつり又小説小日鄭

愚考之を大坂の人山城のきり根田の
麦粉を古産とすりゆゑの台に産を我
玉の産物をあつむふと無しつり又小説小日鄭
よはの玉のるふいおのるる山城のるり
とらふふあつむふと無しつり又小説小日鄭
玉を産るる物をけりる山城のるり
あつむふと無しつり又小説小日鄭
賞ゆつとらふあつむふと無しつり又小説小日鄭
の産物産ゆゑあつむふと無しつり又小説小日鄭
あつむふと無しつり又小説小日鄭
一あつむふと無しつり又小説小日鄭

愚考 秋氏要覽曰 俗家四月の寺
を以て結玄とく 安治九十月七月
を以て解玄とす なるたりの猿
床すきくも九十月にれるる山ふ養りて
おんすくむと書音ふやるるへ
女立や核の奥の一志なり
愚考力サる良香なり 聲香と書一
あうりうりうりうりて法をあらつて聲香云
以年孫生初日唐
去るやあうりも果に片のつみ
愚考任控てとく なるををまててん連
い志とく なるりきりなるるは是ははく出
年終る宿世の白を以年ぬるるは
戸のい片をふめをけりてとく
あうりうり

猿養者芭蕉翁滑稽誓之首

諺也

愚考 史記滑稽傳考物云 滑稽 誓酒器
也 言出口成章 詞不窮 竭若滑稽 誓之
吐酒也 也 滑稽 妙美なり 誓 之 詞
をさるるなり 成美曰 諺 字彙 与 響
同也 字典云 唐 堯 神人 暢 有 諺 在
聖 勅 乎 為 害 在 亥 中 愚考 猿 養
の 一 句 有 六 窓 一 猿 の 名 吟 之 首 韻
之 書 有 非 あり 首 諺 也
非 比 彼 山 寺 偷 衣 朝 市 頂

冠笑只任心感物写興
而已矣

一書小漢室狙戴鵲冠笑朝市金
圈狙偷衣感危徒六の介猿の説
しよらししりて記寸小足らん

洛下逸人凡兆去来随

翁遊字棋跋行窓躍等

凌節斯有歲屬撰此集

玩弄無己自謂絶起孤

腋白裘者也

愚考孟嘗君の狐腋の白裘
直千金ありて天下を致するの是を
幸娘ふありて秦の囚を逃れし
りとの名求裘有り王褒曰千金の裘

一狐之腋よりありし祖翁の猿籠裏ハ此

名求衣より絶起すありて或人發して

云天下を致すの白裘小勝まありとハ

ぬゆ言て曰千疋の狐を殺して一人の

を乞ふる乞のく乞各圖ありて宝と一を

すりハ是よりハ氣をまふ列之人間の

兩具をりて猿小ををあり仁情何

日の福よりあり又支裘小籠

をを合せしりる子北の狐の腋下の

毛を縫あをきしりるを筋の字を

よりの物よりせしり一籠の形とありを文

感よ絶しりる事ハある偷衣頂冠

の笑いよ此すりるありとあり

於是四方喙友憧々往來

愚考ニウ 憧くを新て絶々形あり
或千里寄書く中皆有佳
句日蕙月隆各程久章
然有昆仲強士不集録
者

愚考昆仲オキニワキを昆仲昆を足するの仲を伯
父ありアニ昆ホチと詩六惟然等を七子昆
を弟ありの仲と素堂沾徳無倫亦
を七子昆の友人あり昆等の友人
の昆仲アニの所ホチを素堂ハ文字も又足伯オキニあり
素居竈栖オキニ為オキニ雜オキニ通オキニ信オキニ

愚考居を素栖オキニを竈オキニ寸小オキニ文書
通オキニ一オキニとと雲水斗オキニ藪のオキニあり

且有龍倪婦人不琢磨者
齋言細語為喜同志雖無
至其城何乘其人乎哉

愚考龍の二年あり倪を其年あり
初心の寄りして同志の志樂あり
其志の至らぬといふも接くこと

果分四序依六卷故不違
廣搜他家之文林也

愚考四序四季あり四寸あり以上四巻
仙一卷幻住庵の記共小六巻あり文選
注八張鉄云宗を流に親敷多く
聚人言つる羨あり又法苑珠林曰涅槃經
之麻菟の宗云是宗の羨小ありて階く
の歌号
の書ハ他家をより一とといふこと

秋海小思一合せて歌号五卷の蘊奥なるを知らしむ

維也元禄四稔辛未仲夏余掛

錫於洛陽旅亭偶會北來吟席

見需記此夏題眉尾卒援毫不

揣拙庶哉一藁高張有補于詞

海漁人云

愚考維字彙曰凡策書の年月必維字を以て發之

取之之時の古字有り稔を穀一契の義小

元と眉尾をるる書尾有り王元之曰大張一

網羅群英

一書より云草拈巻 眼疾より一風情なりと蓋朝花集一
兩章より云介鑿の痕と見す

削やうしよ 長刀坂の巻 此風

一書より云京尾谷と麻谷とのるは坂阿り又廣原の
馬の方よりありしりまう考へ

作約をきふ 綿 取の 兩

きき 旅を賜とつれ 五海り鳥

一書より云人喬人のまよ 廣一 女童の風情ありと云

つさり

柳の情 一門とたて たり

百妙よ 世百も 長閑さよ

一書より云五柳子の柳 一巻り 一巻と合めりや

様 裏よりわれとる 衆乃 松家亦

日ハ 衆乃 衆乃 衆乃 衆乃

一書より云已の 名の 衆乃 一 衆乃と比息一 一

らむむ 楚辞よ 梅を忘き 一 楚と合めりや 裏よ 衆乃

の 衆乃より 衆乃より 一 衆乃より 一 衆乃より

らの 衆乃より 衆乃より 一 衆乃より 一 衆乃より

一 衆乃より 衆乃より 一 衆乃より 一 衆乃より

一書より云 衆乃 衆乃 衆乃 衆乃

一書より云 衆乃 衆乃 衆乃 衆乃

衆乃 衆乃 衆乃 衆乃

の 衆乃より や

一書より云 衆乃 衆乃 衆乃 衆乃

衆乃 衆乃 衆乃 衆乃

衆乃 衆乃 衆乃 衆乃

衆乃 衆乃 衆乃 衆乃

衆乃 衆乃 衆乃 衆乃

増補... 賦の句も... 不審之... 書を... 七部の... 改補の... 七部... 弘一... 所了曰

意... 山依... 嵐葉

世の中... 酒屋

け... 賦... 大... 書... 一書... け... 悪...

一書... け... 悪...

一書... け... 悪...

しつり新しきものありてとらふも葉障の媚成りてくさ
未子龍叔のら謝方きい貴之の句は西て成り思海の
ユまてと夕日よきて定めそよ夕日よきて宇治橋の角
と定め持佛ハ志乃佛よとてはたなく通系ハ本條真の
持佛をりて新しきといふれ寸毎あり本條をりてゆへ
平生の難しき持佛の難しき作らるるもの之を
かみて思海の持佛よ夕日の歌なり一中の句の人
おりの新しき又佛くゆへと夕日の句の句の中あり
天文志曰蒼高飛而定天氣

一書よ云古云日見つて集むすれとさくら花
月のおもてふあらうとさくら

新しきものありてとらふも葉障の媚成りてくさ
未子龍叔のら謝方きい貴之の句は西て成り思海の
ユまてと夕日よきて定めそよ夕日よきて宇治橋の角
と定め持佛ハ志乃佛よとてはたなく通系ハ本條真の
持佛をりて新しきといふれ寸毎あり本條をりてゆへ
平生の難しき持佛の難しき作らるるもの之を
かみて思海の持佛よ夕日の歌なり一中の句の人
おりの新しき又佛くゆへと夕日の句の句の中あり
天文志曰蒼高飛而定天氣

愚考杜子美々詩曰鳥入性僻耽佳句一語不驚人死
不休老去詩篇渾漫與春來花鳥莫深愁新しき
ゆき句もあつた句の趣と春來花鳥ハ花候を唱と
春來花ハ則ち秋候と意味深重也
或人新しき詩の心をのみをのみて俳諧の表とする
新しきものありてとらふも葉障の媚成りてくさ
未子龍叔のら謝方きい貴之の句は西て成り思海の
ユまてと夕日よきて定めそよ夕日よきて宇治橋の角
と定め持佛ハ志乃佛よとてはたなく通系ハ本條真の
持佛をりて新しきといふれ寸毎あり本條をりてゆへ
平生の難しき持佛の難しき作らるるもの之を
かみて思海の持佛よ夕日の歌なり一中の句の人
おりの新しき又佛くゆへと夕日の句の句の中あり
天文志曰蒼高飛而定天氣

陳して曰持ハ新しき花をりて佳句とをさく一
人と驚きさびとて定よ俳諧の表は成りて
又難しき曰持の心を者の心を述べて杜子美々糟粕
よみあつた也
陳して曰持の心を者の心を述べて杜子美々糟粕
七言廿八字と僅十七文字のちあつた也
西又あつた也

小股綿よ光をやらせ玉 椿

愚ろ小股綿は来りのなむとの名のつき十條よ
似らる眼衣之考りと六別光相とりは陀の光照ハ十二
光明之別按者小捨の意也又妻百首よ 玉様光照ハ十二
君代よ百かりの味うとむけの表

振かこりのりや廣中の麻の角

愚考准南子曰陽之至是以春則群獸除角

元日や表除き衣のうら表

愚考侍曰東方未明顛倒衣裳顛之例之自公名之
又夫木集曰さらは海よあまの衣をいてきははり思
又つかよの衣をいてきははり思ぬ人も思ぬ喜也一鏡の裏に梅

一書よま伊勢抄傳一月やあぬ春やむらのけはまる
かりぬ赤糸糸ひとつハむとの力よりてくあらぬ鏡の

梅の信香結矣よ白ひて梅の思梅の思人よも
あらぬさらしき事りおく梅よ赤糸糸よさらしき事りと
ト長らぬあらぬ

一書よま鏡の宿の梅れ白と思くさりまれとも赤糸糸
の信と思ぬ人も思ぬ早鏡れららぬ梅の花
かり梅付く白ハあれと都々世の人の鏡乃面ハ思れ
ともうらぬある梅ハ思ぬ人も思ぬさらしき事りと
この白糸糸ハ一

一書よま山のみ雪降く一難波人ハ風志ある
香葉州のかけ難波を鏡のうらぬと思く一て鏡の
うらぬと思く人も思ぬと思く一て鏡の

香葉草のハ梅の名者也
一書よま是人の人よまらぬ方ハ鏡のうらぬと思く
鏡付く梅ハ同く一て鏡の面ハ一ハたる

つらとものこもつて云是と合子り時ハ老せりし
年若しと喜ぶゆりもは彼女子是と合子りし
は百余年を経たりと云々

同國空印寺ハ八百比
丘尼の木像有と云々

曉乃 雷ととささるつや けしき

愚考 ヒマウ之五雜俎曰電似 是震之大者但雨霰寒
而雨電不寒 霰難晴而電易晴如驟雨余在齊魯四五月
之間屢見之不必冬也文書所載電大有如桃李者如鷄子
者如谷者如斗者これハヒマウも多し夏のをりあり
酉陽雜俎曰木苜花夏有電又慶安二年五月十三日武州
川越下陸一 電を大ニ斤小四寸あり人馬多死

燕のむらりむらり 新 云

愚考 傍聖徒の侍り 燕子 許業始到家社能啼
處在天涯是等の意も似たり
後 けしきも能田 けしきも能田 けしきも能田 杜宇

一書云 昔 けしきも能田 けしきも能田 けしきも能田

愚考 食の奇と けしきも能田 けしきも能田 けしきも能田

張るのや けしきも能田 けしきも能田 けしきも能田

愚考 衣冠 けしきも能田 けしきも能田 けしきも能田

石のや けしきも能田 けしきも能田 けしきも能田

愚考 李中 けしきも能田 けしきも能田 けしきも能田

公石云 古今の序 けしきも能田 けしきも能田 けしきも能田

西京雜記曰 目暈得酒食一灯花得錢或乾酪等而
行人至如珠集百有奇事

和名抄ニ 鮫

体... 蛇も... 粘り... 伊勢...

伊勢... 粘り... 蛇も... 粘り...

粘り... 蛇も... 粘り...

一書... 五月... 粘り... 蛇も... 粘り...

その... 粘り... 蛇も... 粘り...

十論... 粘り... 蛇も... 粘り...

古詩... 粘り... 蛇も... 粘り...

其詩... 粘り... 蛇も... 粘り...

も... 粘り... 蛇も... 粘り...

知... 粘り... 蛇も... 粘り...

り... 粘り... 蛇も... 粘り...

け... 粘り... 蛇も... 粘り...

この... 粘り... 蛇も... 粘り...

り... 粘り... 蛇も... 粘り...

かく... 粘り... 蛇も... 粘り...

て... 粘り... 蛇も... 粘り...

き... 粘り... 蛇も... 粘り...

愚考 露沾らるる因藤下所守

五万石を傾きこれ

者この詞平人の白くくあつた

山多れちつとも毒めや露の月

愚考 予は是れを考へていふにありて心きのかけたる
所を音ハ唱れらるるハ秋の樹は露を待たぬ
今もしてあつたつて月日は往くと是れと詠ひ
てちつとも毒めや露の月と云ふ事下

秋よ老やらつてありて

おぼれ秘して情はなつて

秋の山多

候 候をてやみよのありやうの月

愚考 之を如く候に松坂関寺に松本家の傳
をりて是れを傳へぬ事ハ関のありやうと
ありありなり候

川よけ川りや 月乃女

云石云孟子曰徒流下而忘反謂之流徒流上而忘反謂之
連と云く流連流と之樂行

秋形 のまをくくや 星の影

愚考 七夕のときもあつたのとき候に
秋女乃銀河の秋よけの影を
よ白雲安縣乃武妻山は石秋界有て秋形の
しつやされハ秋形の雲と仰つて
七夕のといふ事 秋の影

愚考 長明曰垂あ徳よ曰七月はあつた
ありて河の川連流の連たのり
ぬ限りかかつてもあつた
秋の影を候ひみち
一いつをのみ叶へあつた

くつらうちのくさるる若きものいひそくも多ひのいも
くさるものいひそくを許すもいひそくものいひのす
のいひそくを許すもいひそくものいひのす

妙花のいひの馬骨乃す

馬骨乃す花のいひの馬骨乃す
花のいひの馬骨乃す
花のいひの馬骨乃す

妙花のいひの馬骨乃す

公石云是別妙子も許す
往くは妙子も許す
妙子も許す

妙花のいひの馬骨乃す

一書云本草は津万株花風他花は佳用能く彼丈
佳も多くと慕ひてのまゝくのちをりもゆり

お花はとく鳥のいひのまゝくのちをりもゆり
と慕ひてのまゝくのちをりもゆり
と慕ひてのまゝくのちをりもゆり

再考小文庫より

妙花のいひの馬骨乃す

抱依云古今集より秋の秋乃露と云はれ
うららの雨や秋の秋乃露と云はれ
と云く

妙花のいひの馬骨乃す

子味云云の歳集の詞書より俊成師抄歌と云く
世のものをいひと親しむ
公卿のいひと親しむ
秋のいひと親しむ

十年著一尉言其愛也其亦入志を密に秘せり
後やぬ及りしか作しぬ兼の友

五老 湯去 上 宋 宋の居士と云陶淵明なり宋
の為 陶淵明として語 語の記あり 筆法乃 善ハ 陶淵明の

一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書
一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書
一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書
一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書
一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書
一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書
一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書
一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書
一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書
一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書
一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書
一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書
一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

馬鹿の櫻葉達を解け王を子にけり阿頼の力
新也と云津師の王の事あり善覺者者の如く以て
解け王津師の二王の姉を去り善覺二道
のけり合也と云りて白くせり櫻葉達を大石三寸
肘世書よをけりけりこの肘山竹を置けるも
解けしと云ふ白くし金布を置けるも砕けて一
石併の事ありと血あると云く

東も... 杖... 白髪... の... 葉... 糸

一書よ云本胡文様は徳の弁くして下の句よ
すおるもと云りけりけりけりけりけりけり
五考は句よ一首の侍を附合しけり鶴去の意
よりして句の終を解むもは藤子載侍よ曰
荆門一別各来前二十一年ぬ夢中哉寂封書問
あるけり人蒼年意難寂ま八軍へし名実人ハ

すきり

かま... の... 詩... 書... の... 付...
首の付... 輪書... の... 付...

馬鹿の櫻葉達を解け王を子にけり阿頼の力
新也と云津師の王の事あり善覺者者の如く以て
解け王津師の二王の姉を去り善覺二道
のけり合也と云りて白くせり櫻葉達を大石三寸
肘世書よをけりけりこの肘山竹を置けるも
解けしと云ふ白くし金布を置けるも砕けて一
石併の事ありと血あると云く

東も... 杖... 白髪... の... 葉... 糸

古書よ白ゆの菊ハの事ありと云く並らるるを先師曰
かゝる句ハ令侍也と云く仕たる事ありと云く
用蓋ると云ふ事ありと云く櫻葉達を解ける事ありと云く
あゝためて解けし事ありと云く

接人乃あつらひし 柳の花

一書よ云万葉よあまはけより白飯を奉りて
結りし柳の枝入葉よりや馬車せはれ柳也
けり白飯奉りてし柳の細くをたし人の心を
移らざるなり

説叢大金よ云は白飯軍の徳りや解し
解し白飯軍よ柳の花のあつらひしよ木若の
結し出たりし白飯の白飯よ解きも融せ
寸花も結人よ柳の枝よあつらひしよ
川舟乃あつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
よみよるよる柳の世乃接人を足るよ
の結しよあつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
るよとらひしよ柳の枝よあつらひしよ
花の結しよあつらひしよ柳の枝よあつらひしよ

ほろろとてさる乃あつらひしよ今接人を書し
よあつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
て柳の花乃あつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
才の風流も面白あつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
言めよあつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
のあつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
接人を許しよあつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
接人のあつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
上略柳の花乃あつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
よもあつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
しよあつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
なつらひしよ柳の枝よあつらひしよ

前よあつらひしよ柳の枝よあつらひしよ
是れ接人白飯軍よあつらひしよ柳の枝よあつらひしよ

我首願遊將去世適彼果土碩氣こゝ愛得我
所志の志ありて古柳よかふるあふをなくさめ
まゝに草をい藤もくくくくくくくくくくくく
うひくはま淡笑の柳骨碩氣を氣り愛慈や
あり

臨書や浮世をこゝろ 終麻や

子將去あふ人終麻山うき世をよめよふりす
くいつのよなかり申くあめぬむさきハ福業
乃ぬくふる事のり歸るりと祝くくむりの
を

又春の庭ひくけハ終く
馬考西り上人二兄よあそをくくく高を又春
て糸糸を縁くあひらむその侍あり
極又春の情や極く小豆粥

抱後云天手河覽曰年月十日作膏粥以祀門戸
又春又類聚の白別里風俗西日登日祭門先以揚柳
挿門陸揚折枝所積仍以酒脯飲食及豆粥挿箸
而祭之又拾芥抄曰正月十日亥時煮小豆粥为天
祭之年中粟上則其粥凝時向東方再拜長跪服之終年無
疫氣一掃也くくくくくくくくくくくく

公事根源曰寛平年中ハ揚て煮く
者くりて名をなめくする付あふ

けりのおみや者くくくくくくくくくくくく
柳のきりるの梅もぬく一應ハハ中く煮くく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
先者くくくくくくくくくくくくくくくく

信濃何丸撰釋

序文の始末

愚考り莊子曰惠子謂莊子曰魏王貽我大瓠之種我樹之成而實五石以盛水漿其堅不能自拳也剖之以為瓢則瓠落無所容非不呼然大也吾為其無用培之莊子曰夫子固拙於用大矣今子有五石之瓠何不慮以為大樽而浮乎江湖而憂其瓠落無所容則夫子猶有蓬之心也又後漢書列傳曰費長房者汝南人也曾為市掾有老翁賣藥懸一壺於肆頃及市罷輒蹀入壺中市人莫之見唯長房於樓上觀之異因往

再拜奉酒脯翁知長房之意其神也謂之曰子明日可更來長房且謂長房翁乃與俱入壺中唯見玉堂嚴麗又藻志々藻々水壺の壺の志の深きをいへり又元穆の酒よ壺中天比乾坤外志の意を掲て書するのく江南此瓠頌を記ぬの人るを是と則りし歎号をひさここととる字あり

木の身と小計と 籠と樽と
一書よ花山院の製よ木れ下をすすり
すまはたのほろろ帯
一書よ西上人の才ハりしよ
そまはより 花山のうすすりをきすり
於柳曰古今集よ佐人のわけしてまよりの木の

口を閉て守人の心より守る

月待て飯の内裏の目石

一書し飯の内裏より附りたる大嘗會の時
悠記主記稻を以て授け白なるをを獻家

拙丹後國よりあり悠記主記の稻のより千
載集より雲田の里に稻を以て授けり

よあり愚考日本紀廿九卷曰天武天皇
五年九月丙戌林皮奏曰新嘗十國郡

也齊忌別尾張國山田次丹波國河沙次
並食とて新嘗祭用明帝一年初稻を

并よ供す是則新嘗に悠記主記の漢字
元千載集より大嘗會主基方稻春秋丹波

國雲田をよあり刑部卿範兼のめはりの
きてめも志るぬ代る是を雲田に村の稻を
以て授け

名をさるるしと傳へり

愚考其雨村取五月五日之林の雨とさ
よしと傳へりて此の時飯の穂よりあり

法よ曰同奉るより去中よ他の奉るは
是たは去ても去り授けりより神事死

病のるよ他の奉るより是を以て時飯に
ありて不るとも遠ひて附白を授けり

別と此致又あり

千部よむ花の盛の一乃因
愚考手初る聖武帝天平二十年七月
法華手初る始てあり

類怪矣并淡よ出と云て
此方より大指の庄なり
の境陸山の田も山は
傳一し其方なり
の奇矣其後
を記玉律
して必く必
ありし時
を教多あり
云は法あり
さうして
るりしと
附あり

双六の目を
大、節曰杭
六を日
うきと
いさこの
是ねえ
よ曰西
双陸宋
計長尺
盤子放
未以行
一及表
朝至
愚考名物
魏の流
白木
盤上
甚好
亦移
日不
去
其
序
尺
可
二
其
先
自
の

とらふよきり五月の十日をみりて連うきくま
てありたり今宵一とゆのたおとこの為さう
むと思ひてきり人の掛念んはしりてふ人
てありとふゆり髪をすてるとすふ信後の志
申すのうけり子をさきまてつとゆひてあつ日の
おぬきて終りのやまてとゆひてあつ平仲の
らやみりみり五月五日よりやおぬくらぬり此
傳ういを見よ二百目の雨なむむを待てる平
仲の情ときむきをを三百此流りといふ

城下

愚考は情書なるてとるる海傳りふ似
くまてとて教生とすゆの時をゆ雅ふあつ人
又田舎のの熱的とするるまてむさうのさけ
まはらや情書古筒の流るるまて書るるらり

近海の舟よ人の親の焼舟の籠子うちふ
たりるる見え及ふまを情書の罪人比よやあつき
林の夜姿の物やうの声

女帝花心細きよおそいまて

愚考は深き浄門の山付良少将といふ色女
み介情書をむとちきりてまてハ女いさうあ
さうしてやららるるまて目さきりして
夜やうけぬむとたれいんあつとあつまうす
者の志もれもすふ世三つとやうそあつたの
と一いついやめり人あつあ世三つ今あつあ
よかおむとあきてあつてあつてあつてあつて
すきりあつて此連歌拾遺和歌集よ入物語の次
弟を二台引よあつてあつてあつて
えあつてあつてあつてあつてあつてあつて

そまき世をみるみくゝと時五と

愚考日菟上人の乳新古今集よ見ゆ寂
莫の昔の志至の志引ききよるみくゝの
のまき世目そるききき世山望の窟よそのみくゝ
雷車よのり銭の括女の巻きよよ

一方よはるく 丁 百の 銭

愚考水銭を丁百ありて銭の安き不新
よりしるは文銭の通用なり 関函数鑑よ曰
唐玄宗皇帝安祿山をすめりて百文は
うらむと文運上すと云く 示数事実よの
より 藤林玉環よ曰玉帝為三司使征利剥下
緒銭出入元来以八十為陌每出 賤陌必減其
三之後又為从子跡除五文本細よてと和漢
之才系鑑よ云山邊と大津山関をとるよ一系

所よ往來の商人より 百文よ付 二文はく
の裸役をとる往返よてと文の不足と
又上於憲政の家志 古毫意よ云云をる
代よる欠満ありと云々の改る是ハ代物を
九十六文よりして文の欠満物ありと和夏
始よ見ゆ日本錢を日本紀持統天皇八年
鑄錢目をとる

古きよとら此銭よ 縁 念

愚考東鑑曰為後守以奉新博奕事
經沙汰奴六者放侍者可被許之至下
承可令停止之は一筆錢目勝以下種之よ
態不倫上下一向可被禁制之由被位出也
りしるの數を
時しる百姓よとる烏帽子よとる

配不をを見えし入供清の蛤

愚考百姓の白を強奪しけり又その百姓を

淡路の豪帝よ奪ひしり其石の蛤淡路

よりあす次を檀の浦よ引くそ

一りつゆの大岡寺繩を吹透

成美曰大岡寺繩を吹透

俗タリユとと後音よい

有又一書よ関と無山との

一村の翁をよ此糸よ

田北斤偶よ苗れ

一書よ拳白集りり

一り残るよ子苗や枝の

龜の甲

唾牛

一書よ

枯果

春親

曰好

去我

遇人

曰不

ら

曰老

の孫

乞山

龜

と

云

故

何

ト

龜

子

用

得

意

古

意

意

意

意

ふり為るくいふ言て曰此夜不
良ありて若く為りゆらりと法入を怪し
むま入を鬼を吳王に獻らむと欲して其
まてけき夜我里といふ岸に船を泊るま
て泊りたまはるく山の樹の夜中を呼ぶ
云勞きうらる元徳何を物や鬼言云我
物執事とて進て將よ息くらへて
何そ物やいふ吳らむ南山に薪ををすすとも
我を法入する物さうて樹の云吳ふる法
尊え遊阿り必ま我おらぬき樹を求めて
息心龜の云多くりのいふまはる進禍汝よ
及む心樹則點す吳よ至て王よ獻す孫指
命して是を息心い薪万車を焼とい
ひとま於えのぬい法尊恰を呼て是を
いふえ遊言て曰是を烹るよ老耒を伐て
せよ忽解むと獻する人の曰龜と樹と問
言せしむを汝る則彼樹を伐らぬまはる
よ立所解るとまはる口を綱の門吉人綱
の根烹らる樹のまはる鳴しせに死すとい
ト龜の益あれといふ煮たるまはる牛糞の
賜不應に又此夏を東坡に坐右の銘曰
坐中談笑慎桑龜牛糞の裏句く
百姓の木棉志す人といふのまて
愚考博物志小曰十一月十二月甲を載く
よのまといふ付されたる木棉志す人
あつの本てと初冬をまて改云とまの其
毒氣を憚りしるまのまはる
小糸をまらゆるかしの繩

その我新よりしてをうり賀の魂をさうりく
ふよよりてまえ三大師の書あり一書は田舎
よりして苗代の呪ふ角大師の札を行縄をさふ
とせりあてまゝあるなり 左江田我信流りのそを
苗代の呪ふ蛙のふくしうを串ふまてしてま
ま 愚案宜るるうを種中うれるふ角大師
井出の蛙のひかしく形

誓ふまをてあてまゝくふかぬ
るの舟くしうみなり 供の侍

愚考の源氏須之の巻紫の上のあまきよま
て須之一左邊の侍るるの紫の上を格別のあまふ
よりの誓ふの詞ふ一まどありはあはれあまのま
るまのあまきよまては侍棟の巻のあまきよのあま

まのあまきよま等しうまきよハ須之を附て紫
の上よまあまきよ三のあまきよなり

狐のおそるる ちり ちり ちり

愚考のあまきよとては書ふあまきよのあまきよ
須之の内裏の時狐の表を製衣さうまきよとて
白狐を精と心と信し 記刻雄の山の関る山
口次郎のちりを信しあまきよのあまきよ夜山に
あまきよ狐の来て曰は度須之の精狐の我身
よ及ふ事をさるげきうはさうまきよとて不問語を
るりしてけしあまきよのあまきよを
よまらぬは謂を公よはけて精狐のちりを
思ふとてありあまきよのあまきよとてあまきよ
その山に奇異のあまきよをさう 彼我家は信
ふあまのあまきよ堅く庫裏しして永く教

生を止むとするの此号程の怪談ありて是
とも夫を言ふ事といふはあつて不用なり此
歎を狐とよりいふ事日本美談記に云或狐女
も化して或人の妻も成て子をもうくま後よ
家の犬も海へ遊ばし身をなげしとて其
去て二度家よりつら此時耕種と名存
りりといふ事一首の歌ありて云やあ我
戸よねらぬ玉姫をいそぐよ見ええていよ
し子少しよ狐を妻の身なりといふ詞ありて
不習のや

らる花よ電 詠引する事ありて
小冊の言場よりゆりけりよ

愚者雪詠を和事始よ云手刺休茶を
の対語次入の折電をいよして茶履の裏

平次公卿言時朝大知大尉五一廿一
雪詠を和事始よ云手刺休茶を
の対語次入の折電をいよして茶履の裏

牛の皮を借りてくまきり 扱此所を天正十六年
大園秀吉公北野におわのて大茶湯を催したる
百間の長屋を建て大小名を勿論大舎を
おとされるとを霊祐ふ北野の馬場を附て
二木の間小茶湯を拵せしむるなり
神社考曰北野天神者右大臣道實公之靈
也昌泰四年正月二十日左近筑紫延喜三年
二月廿五日薨于配所葬于安樂寺天慶三年
菅靈託七条坊婢女文子欲接右近馬場天
曆元後立祠于北野正曆四年五月遣勅使於
率府安樂寺詔贈大政大臣正一位云々 追考
○靈の鳴くくふ故事とて冷泉為家卿。○○○
川添みくらのゆれを何とてゆけぬの
るくらむき

